

## 戦争後期

—マレーシアの従軍記—

長野県 唐 沢 甲子雄

私は大正十三年六月一日、長野県の現伊那市西みのわに生れました。我々が少年から青年にと育った昭和十年代は、所謂「非常時」とし、幼い私にも国のため何かしなければならぬ、という心が段々と燃え上がっていたのです。長野県でも、満州に新天地を拓こうと、満蒙開拓義勇隊に入った人、開拓団として入植した人、軍人として志願をした人と、今の日本の若人では想像がつかない時代でありました。

昭和十八年二月一日、長野県松本の歩兵第五十連隊留守隊に入隊しました。私の入隊する本隊は第二十一師団、歩兵第六十二連隊（討四二三四部隊）第五中隊（平山隊）でした。

部隊は当時、仏領印度支那（ベトナム）に駐留して

いましたので、私たち入隊者は、宇品を出航したのですが、途中、長崎県五島列島沖で敵潜水艦が出没しているとの情報で、一旦宇品港へ引き返しました。十八年頃から、制空、制海権はだんだんと連合軍が握り、海上輸送の危険度が増して来たようでした。

再度出港し、七月下旬、幸にして仏印サイゴンに上陸して、薪を燃料とした列車で七日かかり、ハノイ北方プライエン兵舎到着が七月中旬です。

直ちに一期の教育でしたが、仏印の七・八月は、私の育った伊那谷と気候も違い、訓練も想像以上に厳しい日々でした。一期検閲が終了後、教官や班長から下士官候補者になるよう度々強く薦められました。

私は当初、義務兵役を終了した後は現地除隊をして、将来の基礎を築こうと固い決心をして外地へ出かけた関係で、約一週間毎晩のように班長室へ呼ばれての説得でしたので、下士志願を決意したのです。

九月一日、陸路ハノイ—サイゴン（ベトナム）—ブノンペン（カンボジア）—バンコク（タイ）—マレーシア（クアラルンプール、ポートデクソン）へと約一

か月がかりで到着しました。

やっと現地に着くと早々、十月一日から実戦さながらの特訓が続きました。この時期に第一回の命拾いがあった。同じ故郷の伊那谷出身のライバルである親友が長期の病気にかりました。隊は違いますが、黙視出来ず看病し、洗濯や食事などの世話をしているうちに「腸チフス」との診断が下り入院したのです。しかし、私もその頃五日間入院中に、数十人の同僚が死亡し、お陰で親友も私も無事退院することが出来、その時腸チフス罹病の証明を貰っていたので、戦後予防接種を一切しなくても良かったというわけです。

昭和十九年十月一日、無事卒業、同時に助教を命ぜられ、後輩の指導に当ることとなった。その頃になると、連合軍の攻勢は激しく、まさに風雲急を告げる状態となり、レイテをはじめフィリピンの日本軍は圧倒され、ビルマ戦線も撤退が相次ぐという事です。

南方軍の戦局は極度に悪化し、比較的平穩だったジャワ（インドネシア）の陸軍予備士官学校が閉鎖された関係で、幹部候補生四十二人の助教とし約六か月

勤めたのです。候補生の年齢は勿論殆ど私より先輩であり、彼等は高等教育を受け、内地では教育、会社の幹部、農漁村指導者等と、重要な役職を犠牲にすることを余儀なくされた人達だけに、軍隊教育に馴染まない人達が多く、口に言えない苦労も多かったのです。

若い私にとっては、荷の重い勤務でしたが、それを乗り越え、人間は学歴や年齢でなく、人間そのものがその人の価値を決めるものであると感じました。この苦労は、私の人生にとって大きな自信をつけてくれたと感謝しています。

翌二十年四月一日から、今度は下士官候補者三十七名の助教を命ぜられたのですが、これまでは比較的平凡な毎日であったといえるかも知れません。

しかし、この頃から、沖繩に米軍が上陸したり、フィリピンも米軍に圧迫され、ビルマ方面軍は撤退を続けるなど、南方軍の戦況は極端に悪くなる。マラッカ海峡には敵潜水艦が出没することになり、何時艦砲射撃を受けるか判らないということで、厳重な警戒が必要になってきた。

食糧も少なくなり不安もつのるばかり、夜になると学校の建物の周辺に数か所信号弾が打ち上げられ、遙かな高度でB29らしい爆音が毎晩のように聞かれるようになり、信号弾打上げの犯人も判らない。馬來半島も緊迫した空気が益々みなぎって来ました。

この頃は下士官候補者教育と一緒に、マレー人青年（兵補志願兵）の教育も兼ねてやるようになり、私は歩哨教育中に、兵補が空砲（紙製）を射った時、眼前三十センチだったのが幸いして、左眼の中心に直径十センチに力が散ったため急遽入院したが命拾いをした。

その頃、突然命令が下り、教導学校は特に狙われるので、治安の比較的良いジョホールバルに移転することとなったが、実際はシンガポール決戦に備えるためであったのかも知れません。

武器、身の廻り品以外の一切の荷物は船に積み込めとの命令、と同時に私あての命令によれば、船内監視哨長として荷物船内に乗り込めとのこと。しかし同室の先輩で岡山県出身の二人の子持ちの濃野軍曹が後ろ

の山の対潜監視哨長の命令を受けたが、ひどい脚氣だったので「代わって貰えないか」との相談を受けた。

対潜監視員は任務終了後、ジョホールバル迄数百キロの道を全員で歩かねばならない。私は健康そのものであるし「命令を変えて貰えるならば結構です」と答えたのが、結果としては、第二回目の命拾いをし、今日迄命永らえた原因となるのです。運というか、運命というか、相手に対する親切、好意が私自身の命を助けてくれたことになったわけです。

監視哨で終日勤務した夕方、海上に突然十メートル以上とも思われる水柱が立ち、荷物船は瞬時沈没したのである。勿論生存者も皆無とのこと、若し濃野軍曹と勤務を交替していなかったら私が荷物船と共に海没していたわけでありませう。

私達は重い荷物を背負い、監視哨から数百キロを歩き通しジョホールバルに到着して間も無く、運命の昭和二十年八月十五日、皮肉にもその日、ジョホールバルの演習場において南方軍管下の将校教育が行われることになっていた。

演習とは対戦車肉迫攻撃の模範演習である。その実施部隊として一個分隊を編成し、タコ壺を掘り、磁石の付いた爆雷の模型をそれぞれ持たせて戦車に突っ込んだ実戦さながらのものでした。演習が数時間で終了した直後終戦を聞かされ一週間程「ボーッ」として、何が何だか判らず放心状態で過ごしたわけです。その後、その状況についてはいろいろな体験がありますが、個条書のようにして申し述べましょう。

◎終戦直後、英軍（実際は印度軍）にシンガポールの建物宮繕等を引き継ぐ任務で約一週間。

◎クルアン飛行場に毎日通わされ、四十度を越す炎天下で捕虜収容施設の建設を急ピッチでやらされた。

完成して判ったが日本軍を収容する施設であった。

◎その頃、無条件降伏の実情が逐次明るみに出て来て、不安から「何時殺されるか判らんのにこんな苦勞して」と自殺者があとを絶たない状態であった。

◎収容施設完成後直ちに、我々はその施設に入れら

れ、逐次レンパン島に捕虜として送られた。

◎レンパン島捕虜収容所の食糧は一日分の米が湯呑八分目で木の芽、草の芽、虫等あらゆる物を喰った（青虫は生で、毛虫は鉄板で煎って）。

◎さつま芋、タピオカ芋等の苗（つるや茎）も船に積み込んで来たのを仮植して、ボーキサイト（アルミニウムの原石）の礫を砕きながら開墾し、その苗を植えた。

◎茄子、野菜等の種も蒔き付けて、古酒樽に溜った小便を二十倍に薄めて毎日かけた。「農狂が亦もはい出す雨上がり」

◎草木の芽や採集、虫取り班を毎日繰り出して平等に分配して全員が死からまぬがれた。

◎毎夜のスコール（俄雨）があり、露天での生活のため体は弱り、栄養失調もなおらない（栄養失調になると極端にやせた後、水ぶくれになり脚気のようにむくむ）。

◎何としても住む家を早く造らなければならないと、二〜三人一組で切れの悪いナタ様の道具一つで細

長い木を切り倒して、蔓でつなぎ、組合せて、草の葉で屋根を葺き、スコールの災害を防いだその時の皆の喜びは今なお生々しく覚えている。

◎芋類は昨毎に責任者を提示して、競って川底の泥を株間に施し、落葉を集め根元に敷く等して生育を早めた。

そのような抑留生活のうち、昭和二十一年春からぼつぼつ内地帰還の話が、ちらほら聞かれるようになり漸く生還も有り得るような感じがして来た。

野菜や芋類も充分収穫出来て、全員生気を取り戻すことが出来た頃、昭和二十一年五月二十二日私は「船内監視、病人看護及荷物の積下し要員として乗船し、任務終了後は復員を命ず」ということで帰還出来た次第です。

五月二十五日、和歌山県田辺港が見えて来た時の感激は今なお忘れることは出来ません。

## 濠北派遣搜索第五連隊

—海難、ニューギニア防衛戦—

島根県 神 在 繁

私は、大正十一年六月二十四日、島根県山口町で生れた昭和十七年徴集兵であります。広島騎兵第五連隊補充隊に入隊したのは、昭和十八年四月、教育を五か月受け、同年九月宇品港を出航したのだが、十日の日に船団の「大和丸」は、関門海峡を出て直ぐ沈没した。

自分たちの船は基隆を出、馬公経由した後の九月二十七日、カムラン湾でやられた、船には第五師団の補充隊要員約三千名が乗船していたのだが、戦死者は二百四十名ということだった。

潜水艦は五発魚雷を撃ち、そのうち二発が命中、四く五十分で沈没してしまつた。兵隊は救命胴衣を着ていたが、甲板にいた者はやられてしまつた。何千人